

洗礼／衣鉢を継ぐ

牧師 山本 護

「衣鉢を継ぐ」という言葉。「師の使命を弟子が受け継ぐ」という意味あいですが、語源はおそらく仏教の僧侶集団に由来するのでしょうか。つまり「衣」は袈裟、「鉢」は托鉢遊行で胸に抱える鉄製の器。あたかもイエスは、洗礼者ヨハネの「衣鉢を継ぐ」かのように、間近に迫らんとしている神の国を告げ始めました。



「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、〔時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい〕と言われた(マルコ 1 章 14~15 節)。

八ヶ岳伝道所の洗礼鉢は、彫刻家の上田亜矢子さんが大理石を刻んで寄贈してくれたもので、イエスから脈々と「衣鉢を継いで」来た洗礼の象徴です。ちなみに「衣」について、プロテスタント教会は「万人祭司」が原則なので特別な聖衣はありません。

中村不二夫の「イエスの受洗(詩集『使徒』)」という詩、平易な言葉で淡々と書かれています。ふと気づくことがありました。イエスが洗礼を受けた時、「その水は光の粒となって空に弾けた」、「ヨハネはイエスの周りに風を集めた」、「そしてユダは荒野に激しく火を放った」、「そのときイエスの身体は地にあった」。それぞれに、水、風、火、地。すなわち宇宙や人間を構成する四大元素です。そしてその成分には、火を放つイスカリオテのユダが否応なく存在する。キリスト者である詩人中村は、文学めかして罪を取り上げたわけではなく、真実なるものに迫ってユダの責を負うつもりなのだと思います。

ヨハネが集めた風(霊)は、「使者となって天の甕に消えた」鳩(マルコ 1 章 10 節)。その鳩は巨大な塊となって「すぐ胸の高さにまで空は降りてきた」。そして「人々の身体には新しい血がめぐった」。中村は続けて「それから何人もの洗礼志願者が続いた／その列は今日に絶えることはない」と記し、「たとえガリラヤに春が消えても／ヨルダンが血の海に染められても／そのことを知らないものはきつといない」と、その詩を結ぶ。

幾筋にも分岐した「その列」に連なる私たちは漠然と在るわけではなく、「ヨルダンが血に染められている」今日の受洗現場(パレスチナ、シリア)に立たされているのです。中村のようにユダの責を負うために。

洗礼から随分の年月が経ちました。夕刻、礼拝堂の洗礼鉢を眺めていて、衣鉢を継いでユダの罪を負うがゆえに「新しい血がめぐっている」ことを覚えました。Ω